

# 反環境、あるいはエコロジーの詩学 ——マクルーハン理論の再布置化に向けて——

葉柳和則\*

## Gegen-Umwelt oder eine Poetik der Ökologie Zur Rekonfiguration der McLuhanschen Medientheorie

Kazunori HAYANAGI

**Zusammenfassung:** Die vorliegende Arbeit setzt sich zum Ziel, „Gegen-Umwelt (anti-environment)“, einen Schlüsselbegriff der Medientheorie von Marshall McLuhan, im Kontext der Ökologie im weiteren Sinne neu zu bewerten. Die Hauptthese der McLuhanschen „Gegen-Umwelt-Theorie“ heißt: „Von Künstlern geschaffene Gegen-Umwelten und Gegen-Situationen liefern Mittel, die es uns ermöglichen, die Umwelt unmittelbar zu erkennen und besser zu verstehen“. Im Innenraum einer Umwelt kann man nur schwer erkennen, wie sie sich in Wirklichkeit befindet. Durch die „Gegen-Umwelten“ als Medien kommt seine Umwelt zum Vordergrund. Eigentlich hatte der ökologische Gedanke ein starkes Interesse an Sprache bzw. Poetik, das aber durch die pragmatische und technokratische Haltung der neueren Ökologie ausgeschlossen und unterdrückt worden ist. So gesehen liefern die „Gegen-Umwelten“ Möglichkeiten, Ökologie erneut als Poetik zu beleben.

**Schlüsselwörter:** *Gegen-Umwelt, McLuhan, System/Umwelt-Theorie, Ökologie als Poetik*

### 0. 序

反環境(anti-environments)は、ある環境を理解可能なものにするために不可欠のものである。(McLuhan 1989: 5-6 = 2003: 22)<sup>1</sup>

マーシャル・マクルーハン Marschall McLuhan は、現代のメディア研究の嚆矢となった『グロー

バル・ヴィレッジ』*The Global Village* の冒頭で、上のテーゼを提示している<sup>2</sup>。「反環境」という言葉は、決して単発的に現れたものではない。マク

<sup>1</sup> ただし訳語は筆者の責任において部分的に変更している。以下、原書と訳書双方の引用箇所を明示している場合には同様の方針に従っている。

<sup>2</sup> 「グローバル・ヴィレッジ」という概念は、現在、マクルーハンの文脈を越えて、21世紀の環境保護と国際協力に関する鍵概念となっている。慶応大学国際研究講座のサイトなどを参照のこと ([http://ocw.dmc.keio.ac.jp/j/International\\_Center/09-A-011\\_j/index.html](http://ocw.dmc.keio.ac.jp/j/International_Center/09-A-011_j/index.html) 2007.05.02)。

\*長崎大学環境科学部

受領年月日 2007年5月7日

受理年月日 2007年5月8日

ルーハンは、この言葉をその著作において繰り返し鍵概念として使用している。だが、これまでのメディア研究においては、この概念が中心的に論じられることはほとんどなく、ごく周縁的に言及されているに過ぎない<sup>3</sup>。

あるインタビューの中でマクルーハン自身が述べているように、そのメディア研究の核心にあるのは、「私たちを取り巻く技術的環境とそれが精神と社会に与える効果を理解する」ことである (McLuhan [1969] 1995: 236 = 2007: 19)。ここでの「技術的環境」とは、広義のメディア、すなわち「身体の拡張」(physical expansion)をもたらすものすべてによって作り出された環境のことである<sup>4</sup>。それゆえ、マクルーハンのメディア研究を、人間にとっての環境、とりわけ、人間とそれを取り巻く「技術的環境」との相互作用の探求として捉えることができる。ここにおいて「反環境」はどのような存在論的位置を持ち、相互作用の中でどのような役割を果たしているのかが問われなくてはならない。本稿の課題は、マクルーハンの反環境テーゼに焦点を当て、これをメディア環境論の、さらにはエコロジーの基礎テーゼとして位置づけることである。

## 1. 「環境」の不在

だが、「反環境」について考える前に、「環境と

<sup>3</sup> 筆者の知る限り、日本において「反環境」論に言及しているのは、服部(2001)のみである。だが、服部の場合も、この概念についての詳細な検討を行っているわけではない。また、欧米では、Humes(1973)に見られるように、「反環境としての芸術」(Art as Anti-environment)という文脈での議論が散見されるが、メディア研究全体の中でこの概念を位置づけるという方向性は見られない。

<sup>4</sup> マクルーハンの議論における「メディア」を、「メディア装置」や“マスメディア”といった限定的意味に理解することは、その仕事の全貌を見失うことにつながる。マクルーハンの「メディア」とは、「衣服からコンピュータにいたるまで、人間の身体と感覚の拡張を作り出す技術は何でも含む」ものなのである (McLuhan [1969] 1995: 236 = 2007: 23)。のちに展開する、〈文化環境論の理論的基礎としてのメディア環境論〉という本稿の基本的立場を支える根拠のひとつは、こうした「メディア」の定義にある。

は何か」という問いを立てなくてはならない。というのも、環境諸科学の研究者の間で、この点についての共通認識ができていないわけではなからである。とはいえ、傾向としては、地球温暖化、大気汚染、リサイクルといった、いわゆる“環境問題”という言葉で一般に想像される事象を対象にした学問が環境科学であるという漠然とした(知識社会学的な意味での)知識が当該分野の研究者間で共有されている。同時に、たとえば後に触れる飯島伸子の定義に見られるように(飯島 1998)、言語環境のようないわゆる“環境問題”と直接結びつかない領域をア priori に研究の対象外とする傾向が認められる。

この傾向は、環境諸科学において、そもそも環境とは何であるのかという問いが立てられることが極めて稀であるということと密接に結びついている。これは環境諸科学のほとんどの分野、環境経済、環境政策、いやそれどころか環境哲学にすらあてはまる。ここでは環境社会学を事例として取り上げる。2004年に刊行された鳥越皓之の『環境社会学 生活者の立場から考える』の中には、環境に対して社会学的なアプローチを行うことの有効性についての説明はあるが、そもそも「環境」とは何であるのかについての説明は見られない(鳥越 2004: 1-3)。これは例外ではない。たとえば日本の環境社会学の創始者の一人である飯島伸子は、「環境社会学」を次のように定義している。

環境社会学は、対象領域としては、人間社会が物理的・生物的・化学的環境(以下、自然的環境と略)に与える諸作用と、その結果としてそれらの環境が人間社会に対して放つ反作用が人間社会に及ぼす諸影響などの、自然的環境と人間社会の相互関係を、その社会的側面に注目して、実証的かつ理論的に研究する社会学分野である。(飯島 1998: 1-2)

さらに飯島は、「環境社会学」における「環境」とは「物理的・化学的・自然的環境を意味して」おり、「文化的環境や社会的環境は、独立の対象としては含めていない」と述べている<sup>5</sup>。飯島の場合

<sup>5</sup> 飯島は様々な場所で「環境社会学」の定義を行っているが、大きな変奏は行っていない(飯島 1993: 7-8, 2001: 3-4)。

合、「環境」を三つのサブカテゴリーに分割し、その上で「環境社会学」にとっての「環境」をその中のひとつ、すなわ「物理的・化学的・自然的環境」に限定している。しかしその場合でも、「環境」とは何かということは、あたかも自明なことであるかのように、定義の対象から外されている。

結果として、いわゆる自然環境と人間社会との関係が環境社会学の問いの中心にあることは示されるものの、その周縁はあいまいなままである。鳥越や飯島は——少なくとも本稿が検討した主要著作の中においては——「環境」に対してそれぞれが抱いている暗黙の前提に対する反省的な眼差しを向けてはいないのである。その結果、彼らの専門分野としての環境社会学の輪郭はあいまいなものにとどまっている。

たとえば、サウンドスケープないしは音環境について研究しようとするれば、当然「自然的環境と人間社会の相互関係」に注目しなくてはならない。だが、典型的にはセミの鳴き声に見られる（いや、聴き取られる）ように、ある音をノイズだと見なすか、価値のある自然現象であると見なすかは、「文化的環境」の相違に大きく依存している。また、騒音に対する苦情や規制は、「社会環境的」な視点なしに論じることはできない。実際、鳥越にしる、飯島にしる、その研究の中では、「文化的環境」や「社会的環境」を独立変数として扱っている。

とすれば、太陽系（ソーラーシステム）から、生態系、そしてゴミ問題から環境ホルモンに至る、物質・エネルギーレベルの「環境」だけではなく、メディア環境や言語環境といった情報レベルでの「環境」をも含めて、一貫した視角から取り扱うことのできる理論を構想する試みはもったなされてもいいはずである。

本稿では、その試みのひとつとして、ドイツの社会学者ニクラス・ルーマン Niklas Luhmann の「システム/環境」の理論と「反環境」との間の通路を探る。ルーマン理論は、地球規模での社会現象から、個人にとってのミクロな情報環境までを、この「システム/環境」という視角から統一的に論じており、それゆえ、脱領域的な環境科学を構想するための基本的なモデルとして扱うことができるのである。

## 2. システム/環境論<sup>6</sup>

ルーマンは、「環境」を次のように定義している。

環境はシステムに相対した事態である。どのシステムもそれを取り巻く環境から己れだけを例外とする。したがって個々のシステムを取り巻く環境はどれもさまざまである。かくして環境の統一性もまた、システムによって構成されることになる。環境というものはそもそも、システムのネガ的な相関項に過ぎないのだ。[……] 環境とは端的に言って「システムにとっての他なるものすべて」なのである。(Luhmann 1988: 249 = 1993: 287-288)

この定義からすれば、「システム」と「環境」とは、同一の事態の表裏であり、両者は同時に生起するものである。この定義の優れた点は、太陽系（ソーラーシステム）から、生態系（エコシステム）、社会システム、自我システム、細胞システムまでを一貫した視点から論じる可能性を示した点にある。大庭健の理説を中心にして、これを確認したい。

ルーマンの「システム/環境」論を受けて、大庭は「システム」を「その内部で可能な諸関係が限定せられることにおいて、周囲と区別されるに到ったまとまり」と定義している(大庭 1989: 162)。この定義からすると、「システム/環境」関係を成立させる「限定」とは、ある可能的な関係が現実化しうるか否かという「境界」を引くことである。

なぜこのような「境界」づけが必要かということについて、ルーマンは「複雑性」(Komplexität)という概念を用いて説明している。

[……] 世界内のあらゆる種類の実在的なシステムにとって、世界は過度に複雑である。というのも、世界は自己を維持しながら反応しうる以上の諸可能性を含んでいるからだ。(Luhmann 1973: 5=1990: 6)

<sup>6</sup> 本節は拙稿(2006)第二節「有機・因果交流——システムとしての人間」と重複する部分が多いが、煩を避けるために、その都度引用先を示すことはしない。

つまり、すべての可能性が等しく存在する状況がありうるとしても、「人間 [というシステム] は、そのような世界の法外な複雑性に、媒介なしに直面することには耐えられない」(Luhmann 1973: 1=1990: 1)のである。とすれば、人間の住まう場所、人間によって生きられる時空間は、なによりもまず混沌とそれがもたらす解体から人間を守る空間としてあるはずである。

ここで重要なポイントは、人間と環境との間に引かれた「境界」は閉域としてのシステムを成立させるものではないということである。むしろ、「システムの外部との、物質・エネルギー・情報のやりとりに関して閉じていない」(大庭 1990: 204)ことこそが「システム/環境」関係を成立させている。

このことは、生物の世界では、種に固有の環境が「食物連鎖」を媒介にしてマクロなネットワークとしての「共存のエコシステム (生態系)」を作り上げていることによって示されている(河合 1979: 51, 浅田 1983: 29)。有機体が「物質代謝システム」でありかつ同時に「エネルギー代謝システム」である、という点において人間と他の生物との間に大きな違いはない。したがって、人間が「共存のエコシステム」に対して破壊的に振る舞うことは、自己破壊以外の何ものでもない。

だが、「情報代謝システム」とその環境という問題系においては、人間と他の生物の作動は大きく異なっている。人間と他の生物を比べれば、情報代謝系の規模と複雑さ、およびそれを支える媒介＝メディアの発達において大きな違いがある。その意味で、人間システムにとっての環境を論じる場合、情報環境、とりわけ、メディアによって媒介され、変形され、増幅される環境に特化する局面が必要であるということになる<sup>7</sup>。

ここで重要な点は、「情報代謝システム」を人間のみにも帰属させることはできないということである。大庭が熱力学から導き出した知見によれば、「情報」は in-form-ation すなわち「形=フォルムを可能にするもの」であり(大庭 1989: 247)、システムの「境界」を生成させるものとして見るのであり得るのである。大庭は、「ネゲントロピー」(negentropy)を「非平衡状態にあるシステムが、差し引き『どれだけマイナスのエントロピーを環境

から受け取ることによって秩序を維持しているか』の指標」と定義する。この「ネゲントロピー」の取得こそが、「情報」の「受容・処理の過程」である(大庭 1989: 246, 269)。このような見方からすれば、狭義の「情報代謝」の過程のみならず、「物質・エネルギー代謝」過程までも、「かたちを可能にするもの」という意味での「情報」システムの生成と作動として捉えることすら可能である。

「差異を作る差異」(a difference which makes a difference)として「情報」を定義するグレゴリー・ベイトソン Gregory Bateson も、大庭の情報過程論と発想を共有している(Bateson 1972 = 1990: 602)。

「差異を作る差異」とは、「世界」という実質的には無限の差異の集合において、別の「差異」を導き出すような「差異」、別の「差異」へと翻訳されていく「差異」のことである。田中宏によれば、このような「情報」概念は、生態系全般に適用できる。たとえば「太陽から生態系に入射する光エネルギー量」は、「他の量とは異なる量」という意味での「差異」である。これはすなわち、ベイトソンの視点からは、「情報の連鎖」として生態系を捉えることができるということである(田中 1998: 27-28)。とすれば、人間という有機体システムと他の生物システムとの間の違いは、「情報代謝システム」とその環境が、人間においてのみ、巨大化し、精緻化し、複雑化していること、そして何よりも、仮定法や接続法という思考モードによって、可能的なものや非在についての情報の生産と流通が可能になっている点にある。

以上のように、「システム/環境」論に基づいて、人間とその環境について考察したときに初めて、マクルーハンの言う「技術的環境」、すなわちメディア環境を、環境諸科学の問題の布置の中に、位置づけることができる。以下、マクルーハンの「反環境」概念を、「システム/環境」論を補助線としつつ、検討していく。

### 3. 「反環境」論の理路

第1節のインタビューに続く箇所、マクルーハンは次のように述べている。

効果的なメディア研究というものは、メディアの内容でだけではなく、メディアそれ自体と其中でメディアが機能する文化環境(cultural environment)全体を扱うのです。

<sup>7</sup> 後続する諸章で扱うマクルーハンやリップマンの理説はその典型である。

(McLuhan [1969] 1995: 236 = 2007: 20)

グーテンベルクによる印刷術の発明以降、文化環境はメディア装置による媒介と複製のメカニズムなしに存立することはできなくなった。だが、言語が創り出す環境の発生は、印刷術の発明よりもはるか以前にまで遡る。「話し言葉は、人間が環境を新しい方法で捉えるために、そこから身をふりほどくことを可能にした最初のテクノロジーだった」(McLuhan [1969] 1995: 273 = 2007: 265)。そもそも言語それ自体が「身体の拡張」をもたらすもの、すなわち、マクルーハンの定義におけるメディアの最たるものなのである。それゆえ、マクルーハンのメディア論は、機械的ないし電子的なメディア・テクノロジーによってもたらされる環境の研究に限定されるものではなく、広く表象/代理(representation)に関わる諸現象を対象とする研究という意味において、文化環境論の基礎論としての性格を持っていることになる。

マクルーハンの言葉で最もよく知られているのはおそらく、「メディアはメッセージである」(the medium is the message)というテーゼである。「メッセージ」(すなわち「内容」)を媒介するものであるはずの「メディア」が、「メッセージ」それ自体であるという反常識的テーゼを<sup>8</sup>、マクルーハンは、新しいメディア・テクノロジーの誕生が、「完全に新しい人間環境」を生み出す、と言い換えている(McLuhan 1965: vi = 1987: ii)。すなわち、メディアが人間というシステムの知覚を「拡張」することは、知覚の対象と方法が変容し、より重層的かつ複層的になることなのである。

「人間の拡張」が重層的かつ複層的であるのは、新しい環境が古い環境を消滅させるからではなく、「新しい環境は古い環境を根底から再加工する」からである(McLuhan 1965: vii = 1987: iii)。別の言い方をすれば、古い環境は新しい環境の「内容」(contents)になる。そして「自然」が「美的かつ精神的価値の源泉」として発見されるプロセスに典型的に見られるように、この再加工は、「それ以前の環境を芸術形式に変える」(McLuhan 1965: viii = 1987: iv)。

<sup>8</sup> 「内容」(contents)ではなく、「形式」(form)にこそ、主体の意図や欲望を読み取ろうという姿勢において、マクルーハンは 20 世紀のテキスト理論のパラダイムの圏内にいる。

しかし、このような旧環境の芸術形式化が、人びとに意識されることは稀である。それはあたかも「自然」であるかのように感受されている。たとえば、テレビは「あらゆる環境と同じように、人間を取り巻いていながら知覚不可能である (environmental and imperceptible)」(McLuhan 1965: vii = 1987: iii)。なぜなら、「人間は自分を取り巻くシステムないしは文化の根底にある規則を意識することは決してないからである」(McLuhan 1965: viii = 1987: iv)。自らが現に生きている環境は不可視のものとしてあり、「人間は以前の環境だけを意識するようになる」のである(McLuhan [1969] 1995: 238 = 2007: 21-22)。現在の環境、より正確には、環境としての現在は、通常は意識の対象とはなりえない。それは新しいメディアの登場と共に、事後的に見出されるものなのである。

マクルーハンはこの心的機制を「ナルシスの昏睡」(Narcissus narcosis)と呼び、「フロイト的抑圧の概念」と軌を一にしたものであると説明する。すなわち、メディアによってもたらされる「人間の拡張」は、「身体器官、感覚、機能が強化され、増幅されることであり、中枢神経はそれが起こるときはいつでも、それに何が起こったのかを認知しないように絶縁したり、麻酔したりすることによって、影響を受けた部分を自己防衛するために麻痺させてしまう」(McLuhan [1969] 1995: 237 = 2007: 20)。

「複雑性の縮減」としての「ナルシスの昏睡」が、フロイトの抑圧論と同型の関係にあるとしても、前者においては、集合的モメントがより前景化しており、「昏睡」は同一の環境の内にあるすべての主体に共通する状態である。新しいメディアがもたらした感覚の変容は、それが集合的現象、ないしは環境的現象であるが故に、不可視なもの、意識しえぬものたりうる。すなわち、互いに互いの環境を成す人間システムが、情報コミュニケーションを通じて、社会というメタシステムを創発させることが、「昏睡」が持続するための条件となっているのである。

「昏睡」から覚めるための条件もまた、精神分析と平行な関係にある。「この [新しい環境がもたらす] 激変は、大きな痛みとアイデンティティの喪失を生み出します。これは、この力学に意識的に気づくことによるのみ改善されるものなのです」(McLuhan [1969] 1995: 239 = 2007: 22)。とすれば、メディア環境の変容とそれが人間シス

テムに及ぼす影響、そしてそれを制御するための方途は、ある出来事が、集合的レベルでの心的外傷(Trauma)を生み出し、それが症状の不可視の原因となり、方法論的な意識化によって初めて寛解していく過程と同型を描くことになる。既にフロイトの仕事において、精神分析は文化現象を解明するための基礎理論として機能していた。マクルーハンによって精神分析からメディア論へと引かれた理路のネットワークは、文化環境論のもうひとつの基礎理論としてのメディア環境論の位置づけを明確にしているのである。

環境の変容を意識のレベルで捉えることの困難さと、それを意識へともたらず技法について、マクルーハンは、「世界内空間」(Weltinnenraum)という概念を引き合いに出して<sup>9</sup>、次のように説明している。

地というものは、その定義からして、いかなる時点においても環境的で潜在意識的な(subliminal)ものであるのだから、地それ自体を探求することはほとんど不可能である。唯一可能な戦略は、反環境(anti-environment)を構築することであり、文化の中にあって感受性を繰り返し鍛え更新する唯一の人間である芸術家が携わっているのは、多くの場合このような活動なのである。(McLuhan 1989: 5-6 = 2003: 22)

<sup>9</sup> 引用箇所直前で、マクルーハンは「世界内空間」をゲーテ Johan Wolfgang Goethe の言葉だとしているが、これはおそらく誤認である。「世界内空間」はリルケ Rainer Maria Rilke の鍵語である。さらに言えば、リルケの「世界内空間」は、ミクロコスモスとマクロコスモスの照応、ないし、主観性と客観性の相互浸透のことを指している。マクルーハンは、この言葉を「環境世界の内に閉ざされあること」の意に解しているが、これは“創造的誤読”というものである。以下に挙げるリルケの1914年の詩編からの引用を参照のこと。

あらゆるものを貫いて、ひとつの空間が広がっている。 / 世界内空間が。私たちの中を通り抜けて / 鳥たちが静かに飛んでいる。ああ、私が伸びようとして / 窓の外を見やるとすでに私の内部に一本の木が伸びている。(Rilke [1914]1975: 87)

環境を潜在意識的なものから、意識的なものにする、精神分析的過程において、精神分析医と同型の役割を果たすのは芸術家である。そして、芸術家が創り出すテキストこそが「反環境」なのである。実際、この「反環境」の機能を、マクルーハンは「無意識の意識化」と言い換えている(McLuhan [1969] 1995: 237 = 2007: 21)。

マクルーハンは、芸術=人工物(Kunst)が「反環境」として機能するという考案を、多くの著作の要所において表明している。たとえば、『メディアはマッサージである』*The Medium is the Massage* の中では、「反環境」を「対抗状況」と言い換えながら、不可視の動的過程としての「環境」を知覚するための方法について考察している。

環境は受け身の包装ではない。それはむしろ、不可視の能動的過程である。環境の基本原則、遍在的(pervasive)構造、および包括的なパターンは日常的な知覚では捉えることができない。だが、芸術家によって作り出される反環境ないし対抗状況(counter-situations)が、環境を直接認識し、よりよく理解するための手段を提供してくれる。(McLuhan 1967: 68 = 1995: 68)

あるいは、今やメディア論の——繰り返し参照されるという意味で——古典的テキストとなった『メディア論——人間の拡張』*Understanding Media. The Extensions of Man* のペーパーバック版の序文の中では、「反環境」は「対抗環境」と言い換えられている。

芸術こそが環境そのものを知覚する手段を提供してくれる「反環境」(anti-environments)ないしは「対抗環境」(counter-environments)である[……]。(McLuhan 1965: viii = 1987: iv)

現代社会においても、芸術の「反環境」生成機能が失われたわけではない。だが、マクルーハンによれば、「環境」と「反環境」の弁証法は、今やひとり芸術家によってのみ引き起こされるものではなくなった。メディア・テクノロジーの急速な発達、知覚の様式を半ば強制的に再編成する結果となるがゆえに、旧環境の芸術形式化という反自然的なプロセスを前景化させる。これはすなわち、かつては環境の変化を知覚する能力が芸術

家に帰されていたのに対し、「電気的情報から成る新しい環境が、非芸術家の知覚と批判的意識の度合いを更新することを可能にする」ということである(McLuhan [1969] 1995: 238 = 2007: 21)。

「芸術」(art = Kunst)は、「環境」の存在様態を意図的に前景化させ、「知覚と判断を訓練する」技術(art)としてある(McLuhan 1965: viii = 1987: iv)。テクノロジーの発達は、社会全体のあり方を「環境」に対して反省的なものへと変容させながら、「芸術」における実験的フォルムがもたらすインパクトをあまねく「社会」へと環流させていく。近代化の開始と共に分離した「芸術」と「技術」は、電気的メディアの時代においては、再び融合しながら、同時に art の遍在する環境を創り出すのである。

「芸術」は所与の「環境」を「内容」へと変換し、映し出すだけではない。「芸術」には「未来の社会的および技術的発展を予期する力」がある(McLuhan 1965: x = 1987: vi)。ここでの「芸術」は、もちろん「単なる自己表現」でもなければ、「単なる消費財」でもない(McLuhan 1965: viii, x = 1987: iv, vi)。それどころか芸術は、環境をありのままに映す鏡ですらなく、非在を映し出す鏡、ないしは「予言」の技術である。つまり、「反環境」としての「芸術」は、未だ到来せざる環境を映し出すことによって、現在の環境を自然的態度で見るのではなく、そのような見方が構造的にこぼれ落とし、縮減し、抑圧している諸可能性を前景化させることを可能にするのである。

「芸術」に「早期警報システム」という比喻を与えていること、あるいは、「[芸術の目的は]きわめて混乱した革新のただ中に置いてすら、永続する目的に向かう平坦な道を維持すること」という表現に見られるように(McLuhan 1965: x = 1987: vi)、マクルーハンの議論の枠組みにおいては、「環境」と「反環境」の弁証法は、目的に向けての線形的な発展という神学的構造の中に回収されていくくらいがある。このことは、「環境」と「反環境」の弁証法の振幅を狭め、「反環境」概念の持っている潜在的な可能性を縮減させることにつながっている<sup>10</sup>。それゆえ、システム論の立場か

<sup>10</sup> このことは、マクルーハンのメディア論は、技術決定論に傾きがちであり、個々の人間の欲望や想像が、メディア環境の生成のありかたを変容させていくという局面には十分に焦点を当てていないということと関係している。

らは、「反環境」論の背後にある神学的構造を、「別様でもありえること」、すなわち世界の偶有性に向けて開いていくことが必要である。このとき、環境と人間との今在る関係からの超出を促し、別様の関係を構想するための契機を与えてくれる非在の環境としての「反環境」が置かれた存在論的な位置を再定義することが可能となるのである。

#### 4. 「システム/環境」関係を分節化するもの

マクルーハンの理説によれば、現代の電子メディアがもたらした人間の環境の変容に匹敵する変容が、数千年前、「表音アルファベット」(the phonetic alphabet)の発明によって成し遂げられた。「表音アルファベット」が発明される以前の生の形を説明する際に、マクルーハンは「部族的」(tribal)という鍵概念を使用する。部族的環境においては、「人間はすべての感覚がバランスを保ち、同時に使われる世界に住んで」いた。これは、「部族的な深さと豊かな響きに満ちた閉じられた世界であり、聴覚中心の生活感覚によって構成された」口承のコミュニケーションが、文化の基盤であった(McLuhan [1969] 1995: 239 = 2007: 23)。

この世界の中に表音アルファベットは、突然、爆弾のように落ちてきて、感覚のヒエラルヒーの一番上に視覚を据えてしまったのです。リテラシーが人間を部族から追い出し、耳の代わりに目を与え、統合的で深い協同的相互作用と、視覚的で線的な価値観と断片化された意識とを入れ替えてしまいました。[……]この画一的で、連続的で、視覚的なモードを私たちは今でも「理性的」存在の規範と見なしています。(McLuhan [1969] 1995: 239 = 2007: 24-25)

文字を使用する社会は、表音アルファベットの発明以前にも存在する。だが、表音アルファベットは、「意味論的に意味のない音に対応させるために、意味論的に意味のない文字を使う」という点において、象形文字や表意文字とは質的に異なった機能を持っている。表音アルファベットによって、「人間と対象との間には障壁が設置され、映像と音の間に二重性が創り出される」のである(McLuhan [1969] 1995: 241 = 2007: 25)。この二重化、

すなわち視覚と意味と音の分裂と、それらの恣意的な結合こそが、環境を脱部族化させる (detribalise) ののである<sup>11</sup>。

脱部族化とは、社会学的概念に言い換えるならば、人間を共同体から引き離し、近代社会を構築していく過程である。すなわち、表音アルファベットを持つ文化だけが、世界を抽象的に捉える能力を飛躍的に拡大させ、主体と客体、線の時間といった、近代社会の基本的構成要素を手にしたことになった。

行動を加速させ、代わりの形式（言い換えれば応用的知識）を生み出すために、あらゆる種類の経験を、画一的で連続的な単位へと分離することに成功したことが、西欧人が他の人々や自らの環境に対して優位に立つことができた秘訣だったのです。(McLuhan [1969] 1995: 242 = 2007: 27)

表音アルファベットの「拡張」をもたらしたものの、すなわち、人間システムによる視覚的な環境把握の優位を決定的にし、部族的な感覚の布置を崩壊させたのは、印刷機の発明であった。「すべての機械の原型となった [……] 線的で、画一的で、反復可能な活字という新しいメディアは、[……] 人間の根本的拡張として、その環境の全体、すなわち精神 (psychic) 環境と社会 (social) 環境を形作り、変形しました」(McLuhan [1969] 1995: 243 = 2007: 27)。「宗教改革」、「ナショナリズム」、「因果律の概念」、「デカルト哲学」、「ニュートンの宇宙」、「遠近法」、「クロノジカルな語り」、「内省」といった、近代社会を構成する諸要素は、印刷機の発明がもたらした表音アルファベットによって分節化され、再編成されたメディア環境によって生み出された、とマクルーハンを見るのである。この環境は、その記号体系と複製技術によって、精密さと規模と浸透力の点で、部族的情報環境を圧倒している。だがこれは、視覚を中心にした線的な環境把握に典型的に見られるように、複雑性の縮

<sup>11</sup> マクルーハンは表音アルファベットの脱部族化作用について、「今日のアフリカにおいて、個人を部族的網の目から引き離すためには、アルファベットのリテラシーを一世代が身に付けるだけで十分なのです」と述べている (McLuhan [1969] 1995: 241 = 2007: 26)。

減=別様の可能性の排除・抑圧の過程としても描きうる。

ここで注意しておかねばならないのは、マクルーハンが、人間の環境の変容に言及する際に、本質的だと見なしているのは、テクノロジーそれ自体ではなく、それが可能にした世界の分節化であるという点である。

ラジオであろうが、テレビであろうが、[……] 人類の新しい環境は、「ハードウェア」や物理的なものという側面はほとんどなく、むしろ情報であり、コード化されたデータの布置 (configuration) である。(McLuhan [1969] 1995: 273 = 2007: 272)

「コード化されたデータの布置」の変容こそが、メディア環境の変容における本質であるという理説からは、表音アルファベットという言語テクノロジーそれ自体ではなく、それが視覚と意味と音の関係性の形式 (form) を変容させることこそが、人間システムとその環境の界面を再編成するというテーゼを導き出すことができる。

このように考えれば、「反環境」が何にも増して「芸術」でなくてはならなかったことの理由がよりはっきりと見えてくる。なぜなら、20世紀のモダニズム芸術に端的に見られるように、芸術の革新とは、新しい表現対象を見出すことであると同時に、より本質的にはそれを表現するための形式を革新することにあるからである。システムと環境との間に引かれた新しい差異線は、まさしく「フォルムを可能にするもの」としての情報=メッセージなのである。

『メディアはマッサージである』*The Medium is the Massage* は、当初、『メディアはメッセージである』*The Medium is the Message* というタイトルで出版される予定であったが、初校の印刷ミスを見つけたマクルーハンが、そのミス、すなわち *Massage* をそのまま採用した、という逸話が残っている。「コード化されたデータの布置」という形式こそが、メディアの放つメッセージであるというテーゼは確かにマクルーハン理論の核心にあるものである。だが、メディアとは「身体の拡張」であるというテーゼや、表音アルファベットが「感覚のヒエラルヒー」を変容させたというテーゼにあるように、情報の形式の変容は何よりもまず身体感覚の変化として、身体と環境との界面



の形式が変容することとしてあるのである。

## 5. エコロジーの詩学へ

芸術は「反環境」という非在を創り出す。情報代謝システムとしての人間にとって、情報環境が、「現実とその再現」というリアリズム的表象の外部へと拡がっていることこそが重要である。「反環境」は、接続法的ないしは反実仮想的な時空間であり、自らが現実の環境ではないことに自己言及する限りにおいて、「環境」を知覚可能なものにする。この知覚可能性なくして、事実性レベルにおいてシステムによる環境への主体的働きかけが生じることはない。

非在の環境が現実を変容させるという認識は、マクルーハンの「反環境」論だけのものではない。ここでは詳論しないが、20世紀の前半に、ウォルター・リップマン Walter Lippmann の「疑似環境」(pseudo-environment)論において既に、非在の環境が人間の現実の環境を別様の形に変えていくメカニズムが明らかにされていた。リップマンは、人間の行動の多くは、人間自身によって創り出された虚構の環境である「疑似環境に対するひとつの反応である。[……] だから、もしそれが行為である場合には、その結果は行動を刺激した疑似環境の内部ではなく、行為の生じる現実の環境の内部で作用する」と述べている(Lippmann [1922] 1997: 10 = 1987: 29)。

だが既に見たように、現代の環境諸科学において「環境」とされるのは、飯島の言うところの「自然的環境」あるいはせいぜいのところ(事実性のレベルで捉えられた)「社会的環境」であって、虚構表現や個人的・集合的幻想を環境として捉えようという発想は希薄である。芸術が創り出す非在の空間としての「反環境」やメディアの創り出す「疑似環境」が、人間にとっての「環境」のひとつの層/相を成しているという、マクルーハンやリップマンが20世紀の初頭から中葉にかけて提示した環境論を、現代の環境諸科学は研究の埒外に置いており、それどころか、こうした「非在の環境」を非環境として扱っている。

『グローバル・ヴィレッジにおける戦争と平和』*War and Peace in the Global Village*の中でマクルーハンが、「魚たちが全く知らないことのひとつは水についてである。なぜなら魚たちは、自分たちが生きている媒質を知覚することを可能にして

くれる反環境というものを持っていないからである」(McLuhan & Fiore 1968: 175)と述べている。これは先に触れた「ナルシスの昏睡」と同じ事況の比喩としてある。この一節は、「反環境」を創りうる存在である人間だけが、自らの生きる環境に対して反省的な眼差しを向けることができる、ということ論じている。だがこの一節を、「だからこそ反環境を創造しうる人間だけが、魚たちの棲息環境を今在る汚染から救い、人間と水棲生物との間の別様の関係を構想できるのだ」と続けることもできるだろう。「非在の環境」をあらかじめパラダイムの枠外に排除する議論からは、このような展開は生まれえない。「非在の環境」は環境の外部を構成するのではなく、環境の内部に創造されるのであり、それがもたらす別様の環境への運動は、環境諸科学の問題として捉えられねばならないのである<sup>12</sup>。これを捉え損ねることは、環境諸科学、あるいは少なくともエコロジーが、近代批判ではなく、近代のプロテーゼとして機能するという逆説を生んでいる。

「エコロジー」という名の思想は、人間という有機体システムが存在することとその環境が存続することとが「同一事態の表裏」であることの認識から生まれた。だが、いま・ここ、すなわち資本制システムの内部においては、この思想はプラグマティズムとテクノクラシーによって消費され尽くされ、環境の重層性や複相性は失われようとしている。いま・ここでは、人間というミクロシステムと地球というマクロシステムの関係性に対する根底的な問いは、ノイズとして排除され、抑圧されているのである。

ここにあって、「反環境」をめぐる本稿の考察は、エコロジーにおける「環境」とは異質のものにとどまるのだろうか。今福龍太は『ここではない場所』という、まさしくメディア論的な意味の密度を与えられた書物の中で、次のように述べている。

「政治」の領域に投影されるにせよ、「ビジネス」の場に呼び出されるにせよ、エコロジー

<sup>12</sup> たとえば、現代の環境諸科学のパラダイムを自明視する立場からは、本稿で言及したペイトソンのテキストの原題にある「精神のエコロジー」(ecology of mind)を議論の射程に収めることはできないだろう。

をとりまく現在の環境を見るかぎりひとつあきらかなことがある。それはすなわち、現代のエコロジー推進者たちが、あるとき、エコロジック的叡智が本質的に胚胎していた「言語」への関心をすっかり見失ってしまったということだ。

「言語」への関心とは、「詩」への関心といいかえてもよい。[……] (今福 2001: 153)

続いて今福はアメリカ・インディアン<sup>13</sup>の例を挙げている。その民族文化の中では、「シャーマンの身体の中かに実現されていた自然への連続感覚が、じつは「詩」の実践によってその内実を与えられ、「声」という息によって言語化された「詩」は、それ自体の中かにあらゆる生成変化への力を宿していた」のである(今福 2001: 153)。エコロジーは本来、こうした生と環境の別様の分節化の形式に対して高い感度を保持しており、一種の美学ないし詩学という側面を強く持っていた。詩学としてエコロジーを生きることは、まさしく、マクルーハンの言う部族的環境、すなわち「すべての感覚がバランスを保ち、同時に使われる世界に住」まうことと符合する<sup>13</sup>。とすれば、環境をめぐる知が、いま・ここにおいて取るべきスタンスは、プラグマティズムでもなく、テクノクラシーでも

なく、言語による人間と世界の分節化のフォルムへの反省的な態度を基本とすることになるだろう。はたして今福は言う。

現代世界に生きる私たちがいまふたたび回復しなければならないのは、まさにこうした美学的な核心をそなえたエコロジーだ。歌えなくなったエコロジストたちが、必死に政治や科学という権威を援用して、彼らの枯渇した詩精神をひたかくしにしているのが現代だとすれば、なによりも私たちがとりもどさねばならないのは、大地と人間とのつながりをはつきりと名指すための精密でリズムカルな魂をもった「ことば」なのだ。(今福 2001: 154f.)

表音アルファベットが部族的な生を解体することで、近代の成立が条件付けられ、その近代がもたらした自己破壊的な現在と未来に対する反省からエコロジーが生まれてきたのだとすれば、いま・ここにおいて求められるのは「部族的反環境」とでも言いうる人工物＝芸術である<sup>14</sup>。このような「詩神を宿すエコロジー」だけが、私たちに「生態学的叡智」へと導いていくことができる(今福 2001: 155)。非在としての「部族的反環境」を、リズムとフォルムに焦点化しつつ表象し、そ

<sup>13</sup> 今福の議論は決して例外的なものではない。システム論の視角から捉えた、「システム/環境」関係における三つの系の関係(すなわち関係の関係)を、多様な言語論的系譜へと接続していくことが今後の研究の展開にとって不可欠となる。人間と環境との関係を考える上で、「言語」による主体と世界との分節化に焦点化する思想は本質的なものだからである。たとえば、J. G. ヘルダー(Johann Gottfried Herder)は、既に18世紀の末に、『言語起源論』*Abhandlung über den Ursprung der Sprache*の中で、以下のように述べている。

[……] このか弱い、感覚機能を持った生物にみだりに手を触れてはならない。いかに孤立し、全世界の敵対する嵐に絶えず晒されているように見ても、それは孤独ではない。それは自然全体と同盟を結んでいるのである。繊細な絃ではあるが、自然はこれらの絃の中かに音を秘め、これらの音は、刺激を与えられると、同じく繊細な作りの他の生物を目覚

まし、あたかも目に見えない鎖を通して、遠く離れた心に、この見たことのない生物に代わって感ずる閃きを伝達することができる。この嘆息、この音声は言語である。(Herder [1772] 1985: 698 = 1972: 5)

こうした議論の理路をていねいに追うことで、別様のエコロジー理論の系譜を前景化していくことができるはずである。

<sup>14</sup> 注意しなくてはならないのは、「部族的反環境」は現代の電子メディアを排除して、「表音アルファベット」以前の情報環境へと回帰するということを含意してはいないということである。本文中で確認したように、マクルーハンにとって、問題は内容ではなく、形式であった。したがって議論の焦点は、諸感覚の布置ないし関係性にある。上野俊哉が、現代のメディア変容がいかんにして「再部族化」を生み出しているかを論じるために、「都市の部族(Urban Tribes)」という概念を提示しているのは、この点で示唆的である(上野 2005: 16)。

これから立ち現れる感覚イメージに、「システム/環境関係」をめぐる知の系列を織り重ねること。これによって、いま・ここを環境として知覚し、それが排除=抑圧してきた諸可能性を前景化することで、未来に向けての変容の可能性を探ること。マクルーハンの「反環境」論をこのような理路の布置へと開いていくことで、メディア理論はエコロジーの基礎理論となるだろう。

- Bateson, Gregory, 1972: *Steps to an ecology of mind*. New York: Ballantine. (=1990 佐藤良明訳 『精神の生態学』 思索社。)
- 船橋晴俊・飯島伸子編 1998 『講座社会学 12 環境』 東京大学出版会。
- 服部桂 2001 『メディアの予言者 —マクルーハン再発見』 廣済堂出版。
- 葉柳和則 2004 『わたくしといふ現象 —あるいは「システム/環境」関係の人間学—』 所収：井上義彦教授退官記念論集輯委員会 (編) 『東西文化會通』 學生書局 2006年2月、pp. 517-537。
- Herder, Johann Gottfried, [1772] 1985: *Abhandlung über den Ursprung der Sprache*. In: Frühe Schriften 1764-1772. Hg. v. Ulrich Gaier. Frankfurt a. M.: Deutscher Klassiker (=1972 木村直司訳 『言語起源論』 大修館)
- Humes, Dennis Michael, 1973: *Art as Antienvironment*. In: *Art Education*. Vol. 26, No. 9, pp. 2-5.
- 飯島伸子(編) 1993 『環境社会学』 有斐閣。
- 飯島伸子・鳥越皓之・長谷川公一・船橋晴俊(編) 2001 『講座 環境社会学 第1巻』 有斐閣。
- Lippmann, Walter, [1922] 1997: *Public Opinion*. New York: Free Press. (=1987 掛川トミ子訳 『世論』 岩波書店。)
- Luhmann, Niklas, [1973] 1989: *Vertrauen. Ein Mechanismus der Reduktion sozialer Komplexität*. Stuttgart : F. Enke. (=1990 大庭健・正村俊之訳 『信頼—社会的な複雑性の縮減メカニズム』 勁草書房。)
- Luhmann, Niklas, 1988: *Soziale Systeme: Grundriss einer allgemeinen Theorie*. Frankfurt a. M.: Suhrkamp. (=1993/1995 佐藤勉監訳 『社会システム理論』 恒星社厚生閣。)
- McLuhan, Marschall, 1965: *Understanding Media. The Extensions of Man*. (First Paperback Edition) New York: McGraw-Hill. (=1987 栗原裕・河本伸聖訳 『メディア論 人間拡張の諸相』 みすず書房。)
- McLuhan, Marschall, 1967: *The Medium is the Massage. An Inventory of Effects*. Paradise Drive: Ginko Press. (=1995 南博訳 『メディアはマッサージである』 河出書房新社。)
- McLuhan, Marschall and Fiore, Quentin, 1968: *War and Peace in the Global Village*. New York: Bantam Books.
- McLuhan, Marschall and Powers, Bruce R., 1989: *The Global Village*. New York/Oxford: Oxford University Press. (=2003 浅見克彦訳 『グローバル・ヴィレッジ 21世紀の生とメディアの転換』 青弓社。)
- McLuhan, Marschall, 1996: *Essential McLuhan*. Eric McLuhan and Frank Zingrone eds. New York: Basic Books. (=2007 有馬哲夫訳 『エッセンシャル・マクルーハン メディア論の古典を読む』 NTT出版。)
- 大庭健 1989 『他者とは誰のことか 自己組織システムの倫理学』 勁草書房。
- 1990 「訳者解説 I」 ニクラス・ルーマン著 大庭健・正村俊之訳 『信頼—社会的な複雑性の縮減メカニズム』 勁草書房 201-223。
- Rilke, Rainer Maria, [1914] 1975: *Ausgesetzt auf den Bergen des Herzens*. Frankfurt a. M.: Insel.
- 上野俊哉 2005 『アーバン・トライバル・スタディーズ—パーティ、クラブ文化の社会学』 月曜社。
- 鳥越皓之 2004 『環境社会学 —生活者の立場から考える』 東京大学出版会。